

名稱

給セシコトナドモ見エタリ、以テ當時頗ル浴湯ヲ重ンゼシコトヲ知ルベシ、後世浴湯ノ効能及ビ浴法等ニ就キテ、之ガ研究ヲ試ミタルモノハ、實ニ後藤良山、香川太仲等ニ始マル、又湯性ヲ考ヘテ假温泉ヲ造クルコトモ、太仲等ノ創始スル所ナリ、古ク鹽湯ト稱スルモノアリ、思フニ海水ヲ煮テ温湯ヲ造リ、以テ浴療ヲ試ミシナラン、或ハ直ニ海水ニ浴シタルモノモアリシナルベシ、

〔倭名類聚抄河海〕温泉附流黃 冥都山川記云、恨山縣有温泉、百病久病入此水多愈矣、一云湯泉和名

〔箋注倭名類聚抄水土〕湯泉出文選東都賦、抱朴子暢玄篇、舒明紀、孝德紀、齊明紀、温湯同訓、按温泉其媛如湯、故云、由、或云以天由出湯也、略○中 初學記、太平御覽並云、袁山松宜都山川記、今無傳本、新

唐書有李氏宜都山川記一卷、未知是否、初學記引作恨山縣有温泉注、大溪、夏纔媛、冬則大熱、上常有霧氣、百病久疾、入此水多愈、此節是文也、水經、夷水出巴郡魚復縣江、東南過恨山縣、南注云、大溪南北、夾岸有温泉對注、夏燠冬熱、上常有霧氣、瘍疾百病、浴者多愈、即其事也、按說文、温水出、健為澆、南入黔水、非此義、說文又有盥字、云仁也、轉為盥煖字、後人從水作温也、與温水字自別、

〔伊呂波字類抄地儀〕温泉上烏混反 湯泉同 硫黃ユツウ

〔運步色葉集字〕温泉セシ

〔和爾雅地理〕温湯湯泉沸泉

〔倭訓栞伊中編〕二いでゆ 温泉をいふ、出湯の義也、神代より、大己貴命濟民のため温泉に浴し病を療するの法を定めたまへり、よて本邦には温泉諸國に多し、又温泉の神は多く大己貴命也、

〔倭訓栞前編〕三十五いゆ 倭名鈔に温泉をよめり、日本紀に湯と見えたり、

〔雅言集覽三〕いでゆ 出湯温泉の事也、後拾遺、つきもせず戀に涙をなわ、吟本、かす哉こやな、吟本、御幸をみわの神ならば、吟本、有馬の出湯なるべ